政治日本研究【第十一號】
2014 年 6 月，頁 2～26

文法現象に見る日本人の自己意識

—日本語の一人称を中心に—

吉田妙子[1]

１．はじめに

「太初に言(ことば)あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。この言は太初に神とともに在り、萬の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。之に生命あり、この生命は人の光なりき。」[2]（文語訳 新約聖書「ヨハネ傳福音書」1；1-4）

昔、神は人間の目や耳で確かめることはできず、ただ聖書（旧約）に書かれた神の言葉だけが神の実体を知らしむるものであった。神に限らず、言葉は実体を表す唯一のものである。言葉を分析すれば、実体がわかる。日本語を分析すれば、日本人の心がわかる。

日本語学を研究する社会的意義は何だろうか。上手に日本語を教えるという、実利実用に供することだろうか。

例えば、経済学の目的は金儲けだろうか。金儲けなら、毎日株式市況を睨んでおればよく、研究は不要である。そうではなく、マネーの動きを見て世界の動きをつかむことであろう。言語学は、言語内部の構造を見ながら世界の構造をつかむことである。日本語学なら、日本語の構造を見ながら日本社会の構造や日本人の意識を探ることではないだろうか。人間社会や意識は構造体である。言語も構造体である。日本語語を分析すれば、日本社会・日本人の意識の一端を垣間見ることもできるのではないか。日本人が日本人自身の意識構造を

---

[1] 台湾国立政治大学日本語文学系教授

[2] 口語訳「初めに 言(ことば) があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の中に命があった。命は人間を照らす光であった」（新約聖書「ヨハネによる福音書」1；1-4、新共同訳）

知る、つまり自分が自分のことを知るということは、幸せの第一歩ではないか。そう思って日本語を分析し、日本語学を研究し、日本語を教えてきた。

思想は言語の中に秘められているし、逆に言語を解明するには言語使用者の思考形態を探らずには不可能であろう。本稿では、日本語の文法現象に散見される日本人の意識から、特に日本人の「自己意識」というものを覗いてみたいと思う。自己意識、主観といったものを考察する際には、哲学、特に認識論的な観点が不可欠である。また、心理学でも証明されているように、「時間認識」との関連も見逃せない[3]。

以下、筆者がこれまで書いた論文から「自己意識」「対他意識」「時間認識」という３つの要素を拾い集め考察を加えることによって、日本人の意識構造の解明を試みる。

２．日本語における「私」

英語などと違って日本語では、いちいち「私」という一人称主語をたてずとも、ディスコースは成立する[4]。

(１)　Ａ：どこへ行きますか。[5]

　　Ｂ：?私は学校へ行きます。

などの「私は」は余分で、日本語教育ではむしろ不自然で感心しない文とされている[6]。学生の電話でよく聞かれるような「もしもし、私は陳です。」という名乗りは、自分の名前に関する相手の勘違いを正す場合ででもなければ使われず、始発文としては不自然である。

なぜ、日本語に限ってこのような現象が見られるのか。

---

[3] 木村敏『時間と自己』参照。

[4] 本稿では一人称の最も無標の「私」を以って、一人称全体を指す。

[5] Ａの「あなたは」も不自然であるが、これはＢの「私は」の不自然さとは根拠を異にすると思われるので、本稿では論じない。

[6] むろん、質問者が複数の人間に次々にどこへ行くかを聞くという状況を設定すれば、そのうちの一人が「私は学校へ行きます。」と答えるのは不自然ではない。本来、文が自然が不自然かという判断は、主に語用論のレベルで扱われるべき問題であるのだが、ここでは英語に模して「主語―述語」の構文に囚われて立てられた(１)の「私」のような主語を問題にしている。

２．１．感情評価形容詞から

吉田（2005）は「*義経は、気の毒に死んだ。」という文の形容詞連用形の誤用を論じたものであるが、形容詞を属性形容詞と感情形容詞に大別し、属性形容詞をさらに次元形容詞、評価形容詞、関係形容詞の３種に下位分類し、感情形容詞をさらに感覚形容詞と情意形容詞の２種に下位分類した[7]。その際気付いたのは、評価形容詞と感情形容詞は同根のものではないかということであった。

(２)a　（私は）神の罰が恐ろしい。（感情形容詞）

感情形容詞文「（ｘは）ｙがｚだ」の語彙概念構造

［［y ACT ON x］CAUSE［BECOME［x BE IN-z]]]

ｘ：〈Ex.＋Ｉ〉[8]　ｙ：〈Theme：－Ｉ〉[9]　ｚ：〈感覚・情意〉

b　神の罰は恐ろしい。（評価形容詞）

評価形容詞文「ｙはｚだ」の語彙概念構造

（x JUDGE）［y BE AT-z］

ｘ：〈Ex.：±Ｉ〉[10]　ｙ：〈Theme：－Ｉ〉　ｚ：〈評価語〉

即ち､「恐ろしい」は話者の対象に対する感情を表出するとともに、対象の属性を評価するのにも用いられる。このような形容詞を吉田（2005）では「感情評価形容詞」と呼んだわけであるが、このことを宇津木（2005）は、経験主体の「私」と経験対象の「神の罰」とが未分化のまま「恐ろしい」という経験の中に混在している即自的

---

[7] Ａ．属性形容詞[7]：
　１．知覚形容詞
　　①次元形容詞。線・面・体の大小等を表す。「大きい」「高い」「狭い」等
　　②視覚（によって識別される属性を表す）形容詞。「明るいい」「赤い」等
　　③聴覚（によって識別される属性を表す）形容詞。「うるさい」等
　　④味覚（によって識別される属性を表す）形容詞。「甘い」「渋い」等
　　⑤臭覚（によって識別される属性を表す）形容詞。「臭い」「香ばしい」等
　　⑥触覚（によって識別される属性を表す）形容詞。「すべすべだ」等
　２．評価形容詞：対象に対する話者の評価を表す形容詞。「偉い」「強い」等
　３．関係形容詞：相対的・関係的な属性を表す形容詞。「駅から遠い」等
Ｂ．感情形容詞
　１．感覚形容詞：話者の生理状態を表す形容詞。「痛い」「冷たい」等
　２．情意形容詞：話者の心理状態を表す形容詞。「うれしい」「悲しい」等
これは、現在輔仁大学客員教授湯廷池教授のご示唆による分類である。

[8] ［Ex.：＋Ｉ］一人称の経験者

[9] ［Theme：－Ｉ］非一人称の対象

[10] ［Ex.：±Ｉ］一人称・非一人称の経験者（評価者）

状態とし、それを西田幾多郎（1978）の「純粋経験」と結びつけている。そして、a「神の罰が恐ろしい。」の経験主体である「私」を、「神の罰が恐ろしい」という事態が成立する「場」であり、それ故日本語の感情形容詞（或いは「見える」「聞こえる」などの自発自動詞）はいちいち「私は」と言わなくとも、主語が一人称であることが明確なのである、としている。

これに対して伝統的な西洋思想ではあくまで主客二元論の立場に立つゆえ、最初から「私」という主体と「神の罰」という客体が項として存在し、この２項のせめぎあいの中で文が成立すると考えている。それ故、構文において「主語」は欠かせないものとなるし、主語と定位される以上、一人称も三人称も同じ資格で振る舞うことになるわけである。

２．２．日本語構文論から

２．２．１．時枝誠記の「詞」と「辞」

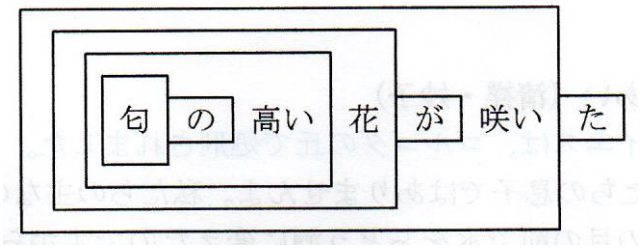
言語（日本語）の認識論的な捉え方といえば、ソシュールの構造主義の向こうを張って言語使用者の主観的経験や言語使用場面を重視した時枝誠記の「言語過程説」が代表的であろう。

周知のように、時枝（1950）では日本語の単語を「詞」と「辞」に分け、客体的な語を「概念過程を含む形式」とし、主体的な語を「概念過程を含まぬ形式」として、前者を「詞」、後者を「辞」と呼んだ[11]。例えば、即自的に驚愕の気持ちを表現する「キャー」という間投詞は「辞」であり、それに反省意識が加わって客体化（概念化）された「驚く」という動詞や「驚き」という名詞は「詞」に属することになる。また、「花が咲いたかな」では、助詞の「が」と疑問助詞の「か」と終助詞の「な」が即自的発話の「辞」であり、これらを客体化すれば、「花が咲いたことを私は自分自身に対して問う」ということになる。

[11] 「詞」と「辞」は、分類基準においては現代の日本語学の用語で言えば「実質語」と「機能語」にほぼ近いかと思われる。

そして、この「詞」と「辞」によって構成される日本語の構造を、「辞」が「詞」を包み込む「入れ子型構造」とし、次のように表している。

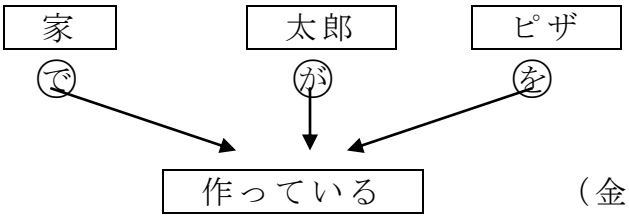
(3)　匂の高い花が咲いた。



［［［［［［［匂い］の］高い］花］が］咲い］た］

この文全体をカバーしているのは末尾の［［咲い］た］であり、重点は述語におかれることになる。これは、三上（1960）の説を支持して展開された金谷（2002）の「盆栽型」と構造を一にするものである。

(4)



（金谷 2002、p.72 より）

このような述語論理の構造では、主語は必須項ではなく他の副詞句と同資格の任意項になり、英語のように義務的に立てられなければならないものではない、ということになる。

前節では感情形容詞に一人称主語は不要であることを述べたが、感情形容詞における一人称主語だけでなく、あらゆる文において主語の位置は文法的に確保されているものではないと言うことができよう。日本語に必ずしも主語は必要ないのだとしたら、一人称の「私」に限らず、すべての人称の名詞が隠れていてよいことになる。しかし、一人称の「私」だけは隠れ方が違う、というのが時枝の「言語過程説」である。

(5)a　匂の高い花が咲いた。

b　（私は）匂の高い花を切り取って花瓶に挿した。（日記文）

日記文などでは、b のように「私は」という主語は省略されるのが常である。しかし、これは復元可能な「私」であり、また日記文という文体論的制約から容易に復元できるからこそ省略されているとも言える。しかし、時枝の言う隠れている「私」とは、b の文だけでなく、a の文にも存在するのである。

時枝は一貫して、客体界（実世界）の表現（この場合は言語表現）には話者の立場が必ず入り込んでいると主張する。そして、「詞」と「辞」の関係について、実世界の表現には必ず話者の立場の表現が伴っている、と述べている[12]。また、「一切の表現は客體的表現と主體的表現の綯ひ交ぜによつて成立するものであ」り[13]、「客體的表現には、必ず主體的表現を伴ひ、主體的なものは、客體的なものを離れて、それだけを表現するといふことは出来ないのである。」と、「詞」と「辞」の相補関係を述べている[14]。即ち、「匂の高い花が咲いた。」という文にも主体的表現がつきまとっていると言うのだが、この場合の「主体的表現」というのが、即ち隠れた「私」なのである。では、この「隠れた私」の正体とは何であろうか。

２．２．２．山田孝雄の「統覚」

時枝の言う「主体的表現」、つまり「隠れた私」の発想は、さらに遡って山田孝雄（1928、1938）の文法論にその原型を見ることができる。山田のこの二著は品詞論を展開したものであるが、一貫して「統覚」の作用を単語認定の基軸に置いており、認識論的アプローチが非常に色濃いものである。曰く、「思想が言語によってあらはさ

[12] 「即ち、詞は思想内容を概念的、客體的に表現したものであることによつて、それは、言語主體即ち話手に對立する客體界を表現し、辭は專ら話手それ自體即ち言語主體の種々な立場を表現するのである。そして、この兩者の表現の間には密接な関係が存在する。即ち話手の立場の表現と云つても、それは必ず或る客體的なものに對する話手の立場の表現であり、客體界の表現には、必ず何等かの話手の立場の表現を伴ってはじめて具體的な思想の表現となるのである。」（時枝 2005、p.204-205）

[13] 時枝（1955）、p.46。

[14] 時枝（1955）、p.46。

れたものを文とい」い、言語を繰る意識の統合点を「統覚作用」と言う（山田 1938、p.316）。この「統覚作用」の働きは、山田の言う「複語尾」(「たい」「らしい」など現代日本語学でいうところのモダリティ、及び受身・使役などの語尾など）において顕著に見られる（山田 1928、p.144、山田 1938、p.107）。「複語尾はその性質によつて分類すると、一、屬性の表現の方法に關するもの、一、統覚の作用に關するもの、の二となる。」（山田 1938、p.104）と言い切る。これは、まさに時枝の「辞」と重なるものであり、「言語過程説」と近似していないだろうか。

また、「用言の要素は屬性と統覚の二である」という言いは、**２．１．**で述べた(2)a「私は神の罰が恐ろしい」との関連を思わせる。この文には、経験主体の「私」と経験対象の「神の罰」とが「恐ろしい」という経験の中に混在している状態であるが、これは一方では「恐ろしい」という「神の罰」の属性を述べ、一方では話者の「恐ろしい」という情意を表すものであった。

とすると、山田の言う「統覚」とは時枝の「主体的表現」、つまり「隠れた私」に相当するものではないかと考えられる。

２．３．認識論的見地から

２．３．１．Kant の“Ich denke”

言語学においては聞き慣れない「統覚」という術語は、18 世紀のドイツ観念論にまで遡ることができる[15]。

イマヌエル・カント（Immanuel Kant）は近世西洋哲学の主客二元論の嚆矢とされる代表的哲学者であるが、主著『純粋理性批判』の中でこう述べている。「私は考える（Ich denke）［という意識］は、私の一切の表象に伴い得なければならない。さもないと、まったく考え得られないようなものまでが私のうちで表象されるという

[15] 山田孝雄などが活躍した大正・昭和初期の知識分子は西洋、特に先進国ドイツから新しい知識を吸収しようとしてドイツ古典哲学への傾倒が大であった。ことにカント哲学は、当時の知識分子にとっての知的アクセサリーとでも言うべき位置を占めていたようである。

ことになるだろう。そしてこれはかかる表象が不可能であるか、さもなければ少なくとも私にとっては無であるというのと、まったく同じことであろう。」（篠田 1961、B132、p.175-176）[16]カントはこの「私の一切の表象に伴う『私は考える』という意識」を「自己意識の超越論的統覚」（原 1955、p.203）と呼び、それが我々に先天的に備わった認識能力である、とする[17]。

「統覚」とは、平易に表現すれば次のようなものであろう。我々は、一瞬一瞬にものを知覚することができる。その知覚を統一するのが統覚である。統覚がなければ、一瞬一瞬の知覚はあってもそれを記憶していることができない。例えば、数を数えることができない。途中まで数えてそれまでの数を忘れてしまい、最後まで数えきることができないのである。また、泥酔して帰宅した翌朝、どうやって家に着いたかわからない、ということがある。過度の飲酒が自制心を破壊することはよく言われているが、社会的行為だけでなく、ある種の刺激は知覚を統御する統覚をも失わせるということである。

言語表現においても、この「統覚」は働いている[18]。言語表出の裏にあるこの意識統一の作用を、山田はカントになぞらえて「統覚」と呼んだわけだが、この「私は考える」という意識統一の作用は、時枝の言う「主体的表現」、つまり「隠れた私」の正体ではないだろうか[19]。

２．３．２．西田幾多郎の「純粋経験」

宇津木（2005）は、時枝の「主体的表現」を西田幾多郎の「純粋

[16] 原文 *“Das: Ich denke, muß alle meine Vorstellungen begleiten können; denn sonst würde etwas in mir vorgestellt / werden, was garnicht gedacht werden könnte, welches ebensoviel heißt,als die Vorstellung würde entweder unmöglich, oder wenigstens für mich nichts sein.* (Kant, 1787, B132)

[17] 二元論者であるカントはその後、この統覚が理性に属するものか感性に属するものかのジレンマに陥っており、それは西田幾多郎による決着を見るのであるが、それについては次章で述べる。

[18] と言うより、あらゆる知的作業の裏には統覚が働いており、言語表現もその一つであるにすぎないと言った方がよい。しかし、これはすでに心理学の領域の問題なので、本稿では深入りしない。

[19] むろん、時枝は二元論者ではないが。

経験」と結びつける。「純粋経験」とは、主客未分の意識状態のことであるが、そのことを西田（1947）は『善の研究』の冒頭で次のように述べている。

「經驗するといふのは事實其儘に知るの意である。全く自己の細工を捨てゝ、事實に從うて知るのである。純粋といふのは、普通に經驗といつて居る者も其實は何等かの思想を交へて居るから、毫も思慮分別を加へない、眞に經驗其儘の狀態をいふのである。例えば、色を見、音を聞く刹那、未だ之が外物の作用であるとか、我が之を感じて居るとかいふやうな考のないのみならず、此色、此音は何であるといふ判斷すら加はらない前をいふのである。それで純粋經驗は直接經驗と同一である。自己の意識狀態を直下に經驗した時、未だ主もなく客もない、知識と其對象とが全く合一して居る。これが經驗の最醇なる者である。」（西田 1947、p.9）

「毫も思慮分別を加へない、眞に經驗其儘の狀態」というのは、例えば朝目が醒めかかった朦朧状態の時に耳に入る鳥の声を考えればよい。そのような時には、「これは鳥の声だ」という自覚も、「鳥の声がするから、今５時頃だ」という判断もなく、何か耳に心地よい刺激がある、という程度の感覚しかないであろう。しかし、健康診断の聴覚検査などでヘッドホンから流れてくる音を聞く時は自覚を以って音に対面し、「これは男の声だ」などの聴覚対象に対する判断や、「私にはよく聞こえない」などの聴覚主体である自己に対する反省意識がはっきりしているはずである。これが、主客が分かれている状態である[20]。[21]

この主客未分の意識が、言語表現においては時枝の言う「主体的表現」と繋がっていくことは想像に難くないのであるが、それは西田哲学の中核とも言える「場所」の理論を媒介として関係しあっている。

[20]日本語では、前者の主客未分の状態の聴覚を「聞こえる」という自発自動詞で表わし、後者の主客既分の状態を意志動詞の「聞く」で表わす。
[21] さらに、人間が何かに集中して何もかも忘れている状態が、「主客合一」の境地である。**４．１．**で後述。

「普通には我といふ如きものも物と同じく、種々なる性質を有つ主語的統一と考へるが、我とは主語的統一ではなくして、述語的統一でなければならぬ、一つの點ではなくして一つの圓でなければならぬ、物ではなく場所でなければならぬ。我が我を知ることができないのは述語が主語となることができないのである。」（西田 1949、p.279）

一読して明らかなように、西田は「我」を「一つの點ではなくして一つの圓」「物ではなく場所」と捉えていることがわかる。これは、カント（1787）や山田（1938）の言う「統覚」、時枝（1950）の言う「主体的表現」の概念と呼応するものであることは議論の余地がないであろう。

では、上文の「述語的統一」とはどういうことか。カントに代表される二元論では主体と客体が対立する形で拮抗しているものの、基本的には「主体が客体を制御する」という構図であった。構文論的に言えば、主語が述語を統御するということであった。主語が一人称であるならば、「私」（自我）が客体に働きかけて、客体を規定するという構図であった。この主客図式を崩し、主客のまだ分かれぬ境地、認識の原体験にまで遡って「我」というものの正体を明らかにしようというのが、西田の狙いであった。「我」「私」というものは、カントの“Ich denke”に明らかなように、そこに全ての述語、すべての規定が統括される認識の統一点であった。しかし、西田において「我」とはそこに全ての述語、すべての規定が集まってくる「場」である。それ故、「私」という意識は述語的性格を帯びてくるのである。

「判斷の立場から意識を定義するならば、何處までも述語となつて主語とはならないものと云ふことができる。意識の範疇は述語性にあるのである。」（西田 1949、p.278）

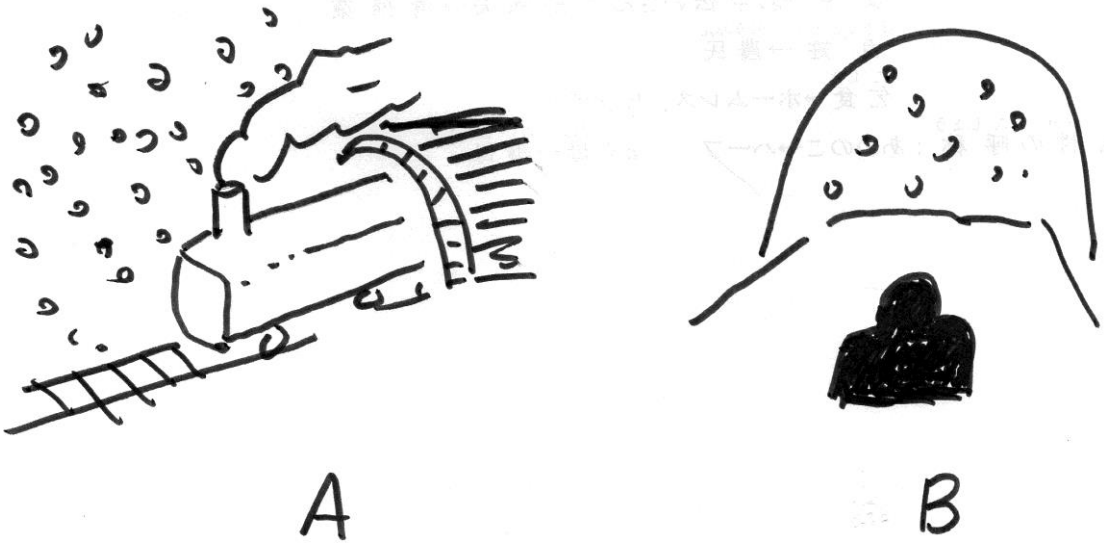
２．４．日本語における「私」の位置

カントの「統覚」とは主体に属するものであり、「私」という意識

は主体の側から客体を統括する点であり、「私」とは主語性を持つものである。

西田の「純粋経験」とは主体に属するものでも客体に属するものでもなく、ただあらゆる述語が集まってくる円のような「場」である。前節で述べた寝起きに聞く鳥の声の例で言えば、何か心地よい音声が聞こえる、という主客未分の意識を成立させる場が、「私」という意識なのである。

宇津木（2005）では、川端康成の『雪国』の冒頭の句の、サイデンステッカーによる英訳の例が挙げられている（p.45-48）[22]。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」というこの有名な句の情景を絵に描かせると、西洋人は列車がトンネルを出かけて雪国に入る様子（A）を描き、日本人はトンネル内を走る列車の中でトンネル前方に垣間見える雪の降る景色を見ている自分（B）を描くと言う[23]。

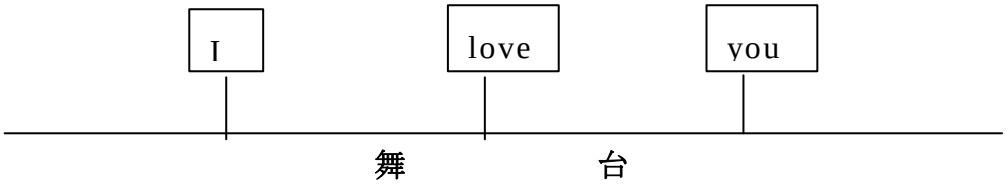


[22] サイデンステッカーの英語訳：The train came out of the long tunnel into the snow country. 汽車という客体を主語にしている英訳と、語り手の視点で描かれている原文ではイメージ構造が違う、という池上嘉彦の批判が挙げられている。
[23] 原文が B のイメージに、サイデンステッカーの英訳が A のイメージに当たることは言うまでもないであろう。

これは、日本人における事態の成り立ちは、常に自己意識においてある、ということを説明するものではないか。

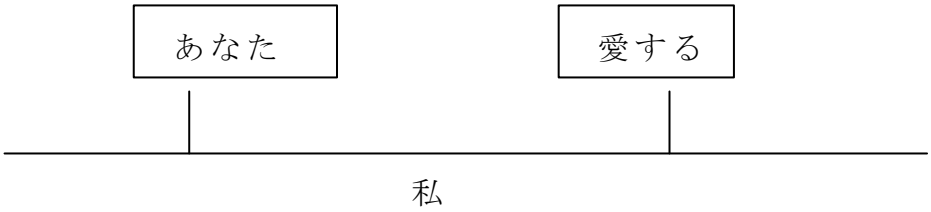
これを比喩を用いて言えば、次のようになろう。例えば、“I love you.”という句があるとする。英語などの西洋語では、あたかも舞台の上で“I.”という主語と“love”という動詞と“you”という目的語が対等の資格で組を成して各々の役割を演じているようである。

(6)　英語における‘I’のイメージ



しかし、日本語の「あなたを愛している」では、「あなた」と「愛する」が舞台上で各々の役を演じており、「私」とは舞台そのものなのである。

(7)　日本語における「私」のイメージ



このように、日本語の「私」とは述語が集まって「純粋経験」が成立する「場」なのである。そして、助詞の「を」や動詞語尾の「ている」などの「辞」は、舞台監督と言えよう。

それ故、日本語の「私」は言語表現されずとも理解可能なのである。

３．他者に対する「私」

３．１．舞台の上の「私」

では、敢えて言語化された「私」とは如何なるものであろうか。つまり、舞台の上に立つ「私」とはどういうものであろうか。それは、対象化された自己、見られる自己、他者の中の自己である。

(8)a　　A：お仕事は？

B：教師です。

b　A：あの学生はダメだよ。放っておきなさい。

B：私は教師です。指導を放棄するなんて、あり得ない。

上の例の a では、主語「私は」を言わないのが普通だが、b では意識的に「私は」が対象化される必然性があるのではないだろうか[24]。

およそ、あるものXを言表するということは、XをX以外のものと区別する意識があるということである。例えば、「男」と言う場合にはその裏に「女」というものと区別する意識が働いているであろうし、「グローバル」と言う場合には、「ローカル」ということが意識化に対置されているであろう。自己対象化とは、「自己」というものを他者や他のものと同等に見るということである。(８)b では他の人と違う「教師」としての立場を強調する必然性があり、「私」が意識されて「私」が「私」を舞台に乗せている。

(９)a　うれしい。

b　私はうれしいです。

通常、親しい者に対しては b のようには言わず、a のようにただ「うれしい。」とだけ言うであろう。b のように言うのは、不特定の聞き手を持つ公のスピーチなどの場合ではないだろうか。

このことを、時枝（1941）は次のように述べている。

「・・・畫家が自畫像を描く場合、描かれた自己の像は、描く處の主體そのものではなくして、主體の客體化され、素材化されたもので、その時の主體は、自畫像を描く畫家自身であるといふことになるのである。言語の場合に於いても同様で、『私が讀んだ』といつた時の『私』は主體そのものではなく、主體の客體化されたものであり、『私が讀んだ』といふ表現をなすものが主體となるのである。」（時枝 1941、p.42-43）

また、幼児はほとんど一人称を用いず、周囲の大人たちが自分を呼ぶ呼称を真似して自分を「〇〇ちゃん」と呼ぶ。「僕」とか「あた

[24] この文に関しては、助詞のハとガの問題も出てくるが、それは別稿に譲る。

し」とかの一人称が出てくるのは、幼稚園なり小学校なりに通って集団生活を始める頃である。一人称を用い始めるのは子供が自己を対象化する第一段階であることは、発達心理学でも明らかである。

３．２.「私」が作る関係性

金田一（1988）は、「境遇性のある語彙」（p.171-174）について述べている。「境遇性のある語彙」とは、発話者によって指示対象が違ってくる語彙である。例えば、「私」という語は、木村拓哉が「私」と言えば木村拓哉を指示し、吉田が「私」と言えば吉田のことを指示する。前述した感情形容詞も、木村拓哉が「うれしい」と言えば木村拓哉の喜びの感情を表すし、吉田が「うれしい」と言えば吉田の喜びの感情を表す。動詞では、「来る」がそうである。木村拓哉が「来てください」と言えば木村拓哉が指示時間にいる場所、つまり彼の縄張りに行くことを指示しているが、吉田が「来てください」と言えば吉田の家か研究室に行くことを指示する[25]。

コソアド指示詞についても、同様のことが言える。吉田（2004）はコソアドについて整理したものだが、コソアの体系は「コとソとア」の triplet でなく、「コとソ」「コソとア」の double binery である、という三上（1970）を指示する形で展開した。中国語や英語には「這―那」「this―that」の２種しかない。中国語ではコとソが未分化なのである[26]。

およそ人が一人でいる時、例えばロビンソン・クルーソーなどのような孤島の一人暮らしをしている時は、ソ系語を使わないのではないか。何故なら、直示用法においてはコ系語は話者の縄張り、ソ系語は相手の縄張り、ア系語は公共の縄張りに属するものを指示す

[25] 「来る」については、金田一（1988）では「行く」の反意語と述べており、これは筆者と見解を異にする。
[26] 英語の this と that の体系は、中国語の這と那の体系と違うようであるが、それはここでは触れない。

る時に使うものだからである[27]。

また、人が知人の所有物を褒める時、どのような表現をするであろうか。

(10)a　課長のネクタイ、すてきですね。

b　<u>その</u>ネクタイ、すてきですね。

明らかに、b の方が親しみがある、(場合によっては馴れ馴れしい)と感じられるのではないだろうか。

日本語のコとソの系統は、自分を取り巻く人間との関係性を示唆するものではないだろうか。土居健郎（1977）の『甘えの構造』で言えば、「ウチ」の関係を作るものであろう。「私」を言語化して舞台に乗せる必要のない、「私」を他者と対置する必要のない親密な関係である。

通常、コは近称、ソは中称、アは遠称と呼ばれているが、その呼称ではソ系語は近くも遠くもない中間的なものを放り込む物置き的な扱いを受けているようである。時枝の言う「主体的表現」、山田の言う「統覚」(本稿で言う「私」という舞台）があるからこそ、「私」を中心とした関係性が、「私」と「公共の場」の中間に存在するのである[28]。[29]

３．３.「私」が作る社会

前節で述べたように、日本人は「隠れた私」を元にして対他関係を作る。そのような「自己」というのは、日本人社会ではどのように評価されるのであろうか。ここでは、日本語における「私」と「我」というものを比較してみよう。

---

[27] むろん、一人暮らしをしている時でも、何かを思いついた時の「そうだ！」とか、納得がいった時の「そうか！」などは用いるであろうが、それは直示用法ではない。これに関しては、吉田（2004)、吉田（2005a）を参照されたい。

[28]廣瀬・長谷川（2010）では談話分析から発話を「私的発話」と「公的発話」に分けているが、筆者はその中間にもう一つの発話スタイルがあると考えている。

[29] これを「世間」と呼ぶのであろうと筆者は考える。中国語では人と対面している時も「這」か「那」しか用いない。中国語圏では「私」と「公共」だけがあって中間の「世間」というものがない、というのはよく聞かれる言いである。

ある学生が「専門学校の時、先生から『私の祖母』という作文課題をいただいたので、びっくりしました。だから、『私の祖母はそんなわがままな人ではありません』と書きました。」と言ったので、こちらがびっくりした。中国語の一人称は「我」であり、「私」という字は「わがまま」(自私)の意味があるようである。日本語にも我(われ)という言葉はあるが、では日本語における「私」と「我」の違いは何であろうか。

「私」と「我」のつく熟語の用例を収集してみよう。

(11)　私:「私的」「私用」「私物(化)」「私(わたくし)する」
　　「私事(わたくしごと)」「私心」「私語」「私生児」
　　我:「我流」「我が強い」「我を張る」「我を通す」
　　「我を立てる」「我を折る」「我がまま」「我田引水」

「私」も「我」もどちらもあまりいいイメージはない。「私」はどちらかというと隠微なイメージがつきまとうし、「我」は中国語では中立的な一人称であるが日本語では最も嫌われる態度を形容する熟語ばかりである。「私」の反対は「公」であり、「私」は「公」に対し「公開し得ないもの」、さらに言えば、「隠すべきもの」というニュアンスがある。(「私語」「私生児」などはまさに隠すべきものであろう。「プライバシー」を中国語で「隠私権」というのは、それを示唆するものであろう。)

日本人にとって「私」は隠すべきもの、おおっぴらに表現してはいけないもの、という暗黙のルールがあるようだ。そのルールを破って突出したものが「我」というものではないか。「我」と言う語は日本人にとってかなり抵抗のある言葉であり、それ故、社会的には「個人主義」が「利己主義」と混同され誤解される所以になっている[30]。

韓国語は日本語と文法や構文がよく似ていると言われる。確かに、

[30] 真正の個人主義というのは全体を無視する考えでなく、個人から出発するが個人が全体のことを考えるという思想である。それ故、個人間の契約を大切にするのである。

韓国人留学生を見ていると、同じ学習意欲を持つ学生なら台湾人学生よりも早く日本語らしい表現を身につけるようである。しかし、韓国語には授受表現における「くれる」がない。また、敬語は日本語と同じように豊富にあり、きれいな敬語を使うことが教養のある人とみなされるのは日本と同じだが、韓国語には謙譲語がないので「うちのお母様がそうおっしゃいました」などのように作文に書いたりする。つまり、韓国語は「ウチ」と「ソト」を区別するスキーマがないのである。

日本人には「ウチ」と「ソト」を区別する意識が常にある。それを、言語では「ソト」の者が「ウチ」の者に恩恵を与えた場合は「くれる」を用いて「ソト」の者同志の授受と区別するし、「ソト」の者に対して「ウチ」のことを言及する時は「母がそう申しました」などと謙譲語を用いることによって、「ウチ」と「ソト」を厳密に区別するのである。

日本語につきまとう「隠れた私」が社会では「隠すべき私」になり、我の強い人は嫌われる。(８)b のように自己と他者を区別する必然性がない限り、(８)a のような場面でいちいち「私」を舞台に乗せて「私は」と言うのは、変に自意識過剰な人間という印象を与えてしまうであろう。

４.「私」と時間

「時間」は哲学でも取り上げられる重要なテーマであるが、心理学でも時間認知は認識一般を左右するファクターとして捉えられている[31]。ここでは、時間と自己意識との関係を考える。

４．１．時間の認知

カント（1787）は、空間と時間を「直観の形式」とした。カントの言葉を借りれば、木村（1992）は、空間を三次元の可視的な「も

[31] 木村（1992）では、「精神病理的な事態における時間体験の異常」（p.65）を問題にし、分裂病者の時間、鬱病者の時間、癲癇患者の時間を論じている。

の」を成立せしめる形式、時間を「こと」を成立せしめる形式としている[32]。そして、時間そのものは対象として捉えられず、人による「こと」把握を通した時間体験において理解できる、と述べている（p.65）。

そこで、我々の「時間体験」というものに目を向けたいわけであるが、先に述べた西田（1947）の「純粋経験」とは主客未分の境地であることは、**２．３．２．**で述べた。それは、人の発達過程で言えば、幼児期である。我々は、ある時期以前の子供の頃のことを覚えていない（いわゆる「ものごころがつかない頃」）。幼児の体験は即自的であり、まさに主客未分のものであろう。幼児は時間というものを知覚していない。時間感覚がないから、「もういくつ寝るとお正月」などと、「こと」を媒介として時間を知ることしかできない。「純粋経験」は、「今」においてある。「純粋経験」を表す語彙は「うれしい」「悲しい」などの感情形容詞、並びに「見える」「聞こえる」などの自発自動詞であった。これらの語は変化を持たない状態性の述語であり、時間において発生するものではないのである。

これが思春期になると自我が分裂し、文学などで言う「青春の痛み」の時期になる。「もう一人の自分がいる」「私とは何か」などという問題意識を持つようになる。

筆者の経験談で恐縮であるが、筆者は以前日本で学習塾の教師をしていたことがある。勉強の自覚がちっともなく成績も振るわず授業中はおしゃべりばかりしていたいわゆる「問題児」の中学生女子が、３年生の受験時期になって急におとなしくなり、一人でいることを好むようになった。ある日、その子が私に語った。「時間というものが私の前を過ぎ去っていく。今の私は、１秒前の私とは違う。そのことが、不思議でたまらない。」と。そして、その子はそれ以来

[32] 木村自身は時間と空間を「形式」という言葉では定位していない。ただ、「もの」や「こと」の把握能力は、人の時間・空間の認知能力と関わりがあることを述べている。なお、「もの」に対する「こと」という語は日本語に特殊なものであり、英語では補文標識の that を名詞化した thatness、ドイツ語では da β を名詞化した da β heit という耳慣れない語にしかならない、と言う（p.12）。

人が変わったように寡黙に勉強するようになり、志望高校に合格した。後で同僚の別の教師が話したところによると、彼女は「吉田先生と大事なことを話した。」とうれしそうに話していたと言う。

この事実は、自己意識が時間認知と深く関わることを示唆していないであろうか。幼児期の意識は即自的である。いわば、主客未分の「純粋経験」の時期である。思春期の自我分裂の時期には、対自意識が芽生える主客分裂の時期である。「今」しかなかった幼児期を過ぎ、「時間」が意識化されて過去や未来まで視野に入れた思考ができるようになり、続いては因果関係の認識に至る。このように時間を相対化することができるようになると、自分以外の「もの」や「こと」があることを了解して主客が安定するようになる[33]。

では、主客が再び合一することはないのであろうか。西田（1947）によれば、それは「愛」においてである、と言う。

「我々が物を愛するといふのは、自己を捨てゝ他に一致するの謂である。自他合一、其間一點の間隙なくして始めて眞の愛情が起るのである。我々が花を愛するのは自分が花と一致するのである。親が子となり子が親となる此處に始めて親子の愛情が起るのである。」（西田 1947、p.197）

最終的に西田は朋友の愛から人類愛、神の愛へと進み、宗教論に行き着くのであるが、本稿では「対象と一致する」という点に着目したい。人が何かに集中して夢中になっている時は周囲のことが目にも耳にも入らず、寝食さえ忘れている。これぞまさに主体と客体が合一している境地であると言えよう。このような時には、もはや

[33] これに対して、中国系の社会では子供の反抗期の現象が日本より弱いか、あるいは違った形で生じるようである。それがどのような形で現れどのような意味を持つのかは、教育専門家ではない筆者の狭い知見ではまだ全般的に知る由もないが、何人かにインタビューしたところ、どうも日本の子供の思春期の様子とは違うようであることがわかった。詳細な調査は今後の研究にに委ねるが、日本の思春期の子供の場合は、それまで大人に守られ支配されていた「自分」というものの独立したアイデンティティを求めるために周囲の大人社会に対して批判精神を持ち、様々な試行錯誤をする。それが「反抗」という形で現れるのだが、中国系の子供の場合、アイデンティティは「家族」というものによって幼児期から守られているのではないかと思われる。だから反抗期も親や教師に対する一時的な反抗で、一定の時期を過ぎるとまた安定するようである。

時間もない。即時的な純粋経験が「主客未だ分かれず」であるならば、主客合一の境地は「主客既に分かれず」であろう。

思春期のような「主客分裂」を経てこそ、「主客合一」の境地が待っている。このように、時間を運ぶ「こと」の認識は時間認知と深く関わっているのであり、述語の束である日本語の「私」のあり方は、日本語のアスペクトのあり方に反映されている。それについて、次章で述べる。

４．２．文法現象に見られる日中の時間認識

４．２．１.「存在」と「時間」

中国語にはテンスを表す明確な助詞がないとよく言われる。

(11)a　這個電池没電。有没有別的電池？

b　昨天有没有下雨？

c　聴説澎湖是個很好的地方、你有没有去過？

上記の a は物があるかないかを問題にしている文であり、b は過去の事実について聞く文であり、c は聞き手の経験を問う文である。中国語では、時間が直接言語表現されることはなく、時間においてある経験として表現される。つまり、時間も「もの」や「こと」のように「存在」として表されるようである。「存在」とは超時的なもの、無時間的なものであるからして、中国語の時間表現は過去から現在への「線」ではなく、過去を含めた悠久の時間の中の「点」として表現されているようである。

そのためか、中国語母語話者は変化の表現が苦手である。

(12)a　*私はこの頃、太ります。(→太りました)

b　*結婚して、子供があると大変です。(→できる)

上記の a は変化動詞「太る」という語彙情報に引っ張られて、動詞語尾のアスペクトに気がつかない例であり、b は中国語の「有」からの母語干渉である。

４．２．２.「こと」と「こと」の時間関係の把握

吉田（1999）は、日本語の時間副詞「もう」と中国語の「已経」の対照研究をしたものである。その中で日本語と中国語では時間表現がだいぶ違うことに気がついた。

(13)　子供は寝た。

孩子睡著了。

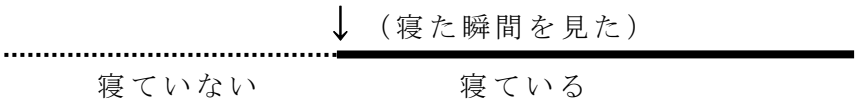
(14)　ただいま・・・あれ、もう寝ている。

我回来了・・・咦？　他已経睡著了。

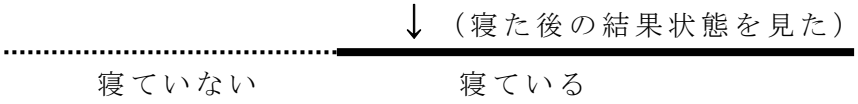
上記の a は子供の状態を表現する発話、b は母親が帰宅して子供が寝ているのを発見した時の発話である。

(13)(14)の発話は、それぞれ下図の矢印の部分に話者の視点がある。

(13)'



(14)'



日本語では出来事完了直後の事態はタで表し、出来事完了後の結果存続状態の事態はテイルで表す。しかし、中国語ではどちらも「了」である。

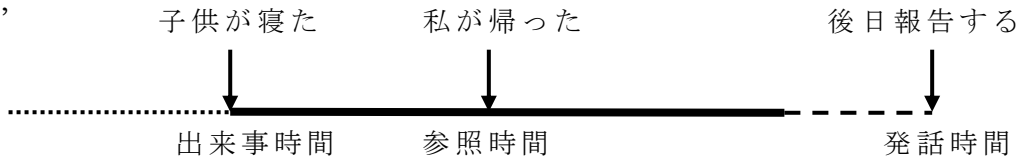
また、(14)の事態を後で妻が夫に報告する時、何と発話するか。

(15)　私が帰った時、子供はもう寝ていた。

我到家的時候、孩子已経睡著了。

これは、さらに複雑なアスペクト表現である。この文には、子供が寝たという「出来事時間」、出来事が発見された時の「参照時間」、それを報告する「発話時間」が絡んでいる。

(15)'



(13)は、出来事時間（子供が寝た時間）と発話時間が一致している。(14)は、参照時間（子供が寝ていることに気づいた時間）と発

話時間が重なっている。(15)は、「出来事時間」と「参照時間」と「発話時間」の３種が別々に存在する[34]。

(15)において、中国語では出来事時間の「帰った」はアスペクト助詞のない「到家」、「寝ていた」は「睡著了」と「了」が使われている。(13)(14)と対照してみると、中国語は「寝た」も「寝ている」も「寝ていた」も「了」が使われることになる。つまり、発話時間は常に事件時間に寄り添っているのである。これは、中国語のいかなる時間表出態度を示唆するものだろうか。

(13)(14)(15)の日本語文で、テ、テイル、テイタが使い分けられているのは、発話時間が違うからである。(13)(14)(15)のテ、テイル、テイタの表現は、いずれも発話時間から見たアスペクト表現である。日本語では発話時間（今）を中心に出来事が語られる。つまり、発話時間に照準を合わせて過去の時間表現がさまざまに動くのである。

しかし、中国語では発話時間が事件時間に応じて過去現在未来を自由に移り行く。前節では、中国語のアスペクト表現においては「時間も「もの」や「こと」のように「存在」として表される」と述べた。つまり、「存在」と「時間」が重なって述べられているようである。中国人はあたかも歴史を不動の存在とみなし、歴史の時間の中を自由に動いているのではないか、とさえ思えるのである。

５．結びに代えて

以上、哲学、心理学、国語学の助けを借りて、日本語の「自己意識」について考察してきた。

西洋認識論では、カントの“Ich denke”の意識ががすべての表象につきまとうとして、自己意識の概念を提示した。しかし、西洋哲学の流れの中ではその意識が主観として実体化され、主客二元対立の図式を呈することになった。しかも、観念論の系譜の中にあっては主体が客体に働きかけ制御する、という構図になった。かくして、言語においても主語が義務的なものとして立てられ、対象は主語に

[34] それ故、「もう」は時間関係副詞であることを、吉田（1999）で述べた。

よって規定を受けるものとなった。それ故、英語では自動詞よりも他動詞の方が基本のようである[35]。

西田哲学においては「我」の意識は実体として立てられることはなく、述語規定の集まる「場」とされた。その「場」において展開される認識が「純粋経験」である。

西田の「場」は、時枝文法においては「主体的な語」「概念過程を含まぬ形式」の「辞」へと繋がって行き、三上の主語廃止論に続く。

そのような日本語構文事情において発話される文で、主語の「私」が語られないのは決して主語が省略されているのではなく、述語の中に「私」という主語が隠されているからである。「水が飲みたい」という時は、「たい」の中に「私」が示唆されており、構文的に主語の存在が保証されているからである。述語を分析して初めて主語が浮かび上がってくる。日本語では「私」という主語が嫌われているのではなく、実は「私」中心の言語なのではないだろうか。「中心」と言うより、「虚焦点」と言った方がふさわしいかもしれない。

日本語はまた、発話時の「今」を基点としたアスペクト構成になっている。そのことを中国語と比較して、第４節で見た。

英語の「スル型言語」に対して日本語は「ナル型言語」と言われているが、それは主体が表舞台に立って客体を規定するのでなく、常に「隠れた私」が舞台裏で糸を引いているという意識構造が文法構造に反映しているためだと思われるのである。

---

[35] これに関しては、生成文法の大家影山（2008）の言が非常に示唆的である。「なぜ、自動詞ではなく他動詞が基本なのだろうか？　それは、おそらく、英語国民のモノの見方、発想の仕方に由来しているのだろう。・・・英語国民は個人主義であり、なにか出来事が起こった場合でも、誰が（あるいは何が）それを行ったのかということを常に意識する。たとえば、思いがけない人が尋ねてきたとき、日本語なら『どうしてここに来ましたか？』のように言うところを、英語では What brought you here? のように表現することができる。日本語なら『このたび結婚することになりました』という風に、成り行きとして表現するところを、英語なら I have decided to get married. のようにはっきりと主語を表明しなければならない。このように、日本語では『自然にそうなる』と表現するところを、英語は『誰か（何か）がそうさせた』のように言い表す傾向がある。」（影山 2008、p.179-180）思うに、日本語ではあれだけ当たり前に使われ、その存在が自明な非対格動詞がまだ「非対格仮説」とされているのは、人以外の物が自然に動くということが腑に落ちない、あるいは信じたくないからではないかと勘ぐりたくなるほどである。

冒頭で述べたように、言語は構造体である以上、意識構造を反映していると言うことができる。脚注 36 でも述べたように、英語は英語国民の意識を反映し、中国語は中国語国民の意識を反映している。意識は社会や歴史に作られたものである故、言語を分析することは社会や歴史、国民性などの理解に繋がると考えている。

【参考文献】

宇津木愛子（2005）『日本語の中の「私」』創元社

影山太郎（2008）『形態論と意味』くろしお出版

金谷武洋（2002）『日本語に主語はいらない 百年の誤謬を正す』講談社選書メチエ

木村敏（1992）『時間と自己』中公新書

金田一春彦（1988）『日本語　上・下』岩波新書

鈴木泰（1999）『古代日本語のテンス・アスペクト―源氏物語の分析―』ひつじ書房

土居健郎（1977）『甘えの構造』弘文堂選書

時枝誠記（1940）『國語學史』岩波書店

時枝誠記（1941）『國語學原論』岩波書店

時枝誠記（1950）『日本文法 口語篇』岩波全書

時枝誠記（1955）『國語學原論續篇』岩波書店

時枝誠記（2005）『日本文法 口語篇』岩波全書セレクション

西田幾多郎（1947）『善の研究』『西田幾多郎全集 第一巻』岩波書店

西田幾多郎（1949）「場所」『西田幾多郎全集 第四巻』『働くものから見るものへ』所収　岩波書店

廣瀬幸生・長谷川葉子（2010）『日本語から見た日本人』開拓社

藤井貞和（2010）『日本語と時間―〈時の文法〉をたどる』岩波新書

三上章（1960）『象は鼻が長い 日本文法入門』くろしお出版

三上章（1970）「コソアド抄」『日本語研究資料集・第１期第７巻　指示詞』所収　ひつじ書房藤井貞和（2010）『日本語と時間—「時の文法」をたどる』岩波新書

三上章（1972）『現代語法序説 シンタクスの試み』くろしお出版

三上章（1972）『続・現代語法序説 シンタクスの試み』くろしお出版

山田孝雄（1928）『日本文法講義 主語廃止論』寶文館

山田孝雄（1938）『日本口語法講義』寶文館

Kant, Immanuel（1787）“Kritik der reinen Vernunft” Felix Meiner, Druck 1961

イマヌエル・カント著、篠田英雄訳（1961）「純粋理性批判」岩波文庫

イマヌエル・カント著、原佑訳（1966）『純粋理性批判』理想社

【自著参考文献】

吉田妙子（1999）「副詞「もう」が呼び起こす情意性—中国語話者の『もう』の使用に於ける母語干渉—」日本語教育学会『日本語教育 101 号』p.61～70

吉田妙子（2004）「習慣行為を表わすスルとシテイル——性質叙述性と外部視点性——」台湾日本語文学会『台湾日本語文学報 19』p .365～389

吉田妙子（2004）「指示詞コソアの振舞いの一貫性—縄張り理論の再検討—』台湾日本語教育学会『台湾日本語教育論文集８』p.31～61

吉田妙子（2005a）「対定型句におけるコソアドの振舞いと左右行列」政治大学日本語文学系「政大日本研究　第２号」p.45～68

吉田妙子（2005b）「感情形容詞連用形の副詞用法の制約—『義経は気の毒に死んだ』は何故誤りか—」台湾日本語教育学会『台湾日本語教育論文集９』p.1～32

【採集文献】

日本聖書協会（1997）『舊新約聖書 文語訳』

日本聖書協会（2008）『聖書 新共同訳』